書籍：「障害者の経済学」を読んで

障害者自立支援法の４月からの施行で、従来の措置制度から利用料の一部を負担する契約制度に、日本の福祉施策が質的に大きく方向転換したことはご承知の通りである。

つまり、一部負担にしろ契約制とは金銭の授受が絡む市場経済の仕組み（サービスの「購入・提供」、または、「需要・供給」の関係）になることでもあり、その観点からは、これからの障害者問題はどういう意味をもつことになるのかなあと思っていたところ、書籍広告で「障害者の経済学」が目に止まり、早速購読した。

読み進む内に、「おい、おい、著者は我が HP のファンで、しばしば覗いているのかな？」と思う程、似たような記述や、同じ参考文献も多く目についた。

さて、著者は経済学者であり、「・障害者問題がわかりにくい理由　・「転ばぬ先の杖」というルール　・親は唯一の理解者か　・障害者差別を考える　・施設は解体すべきか　・養護学校はどこへ行く　・障害者は働くべきか　障害者の暮らしを考える　・障害者は社会を映す鏡」の章立てで、経済的視点から、過去の、また現在の障害者問題の側面を分析し、また、経済的視点から、これからの障害者問題に提言を行っている。。

（経済学の分析対象は、単に金銭の授受関係だけをいうのではなく、人間が起こした行動のインセンティブの部分とか。詳細は本をお読みください。）

「障害者問題に経済的側面は馴染まない」という意見もあるが、社会生活は、経済活動を抜きにしては存在しえないと思う。

まして、「障害者も地域で生活を！」と謳われて今、益々、障害者問題も経済的側面を含めた取り組みが大切なだけに、若干の専門用語の知識、また、経済活動とは何か、どう考えて行くことが大事かを、障害者問題を通して具体的に理解、検討する上で、この本は参考になるのでないかと思う。

著者が「経済学の視点から冷静な目で障害者について考えたつもりである。そのため、記述のなかにあまりにも当事者に対して厳しいとのご批判を頂戴する箇所もあろうと思うが、これも一つの考え方だとうことでご理解を賜りたい。」と書いている。

もしこの本が批判の対象になるなら、さしずめ当 HP は、関係者からは「批判の的」になっているのかなあと、つい思ってしまった。

批判の的になるならまだいいが、「いつもの厚かましい阿部節がまたかぁ～」と、呆れられてるだけかも…。

（2006 年 4 月 24 日　記）